

ブレヒトの『乞食 一名 犬の死』について

友 永 輝比古

要旨：1919年の作品。皇帝と乞食の対話劇。第1次世界大戦敗戦後のドイツは激動期に入り、各州の皇帝は退位し、血で血を争う政権争いが起こり、世相はさまざまな価値観で混乱していた。そんな中で、乞食（アウトロー）の世界観と皇帝の世界観を対立させて書いたのが、『乞食 一名 犬の死』である。一幕ものでデッサン風と言えるし、また、寄席芸風的な感じがしないでもない。ここでは、21歳のブレヒトが、時代を大まかに捉える上で、戦争に対して、皇帝（一般論的に言って為政者）に対して、歴史に対して、そして貧困に対してどんなイメージを持っていたのかを探る。

1919年の作で、皇帝と乞食の対話劇。このころドイツは第1次世界大戦に負け、国内は経済的にも社会的にも大混乱となり、帰還した兵士をはじめとして失業者は膨大な数になっていた。各州の皇帝たちは国民の信頼を失い地に落ち次々と退位し、国民の間では銃器を持つての政権争いが続いていた。街頭では乞食や傷病兵が手回しオルガンなどを鳴らして、投銭でその日暮らしの生活していたことであろう。この作品はその状況を反映している。とは言っても、スパルタクス団の蜂起を扱った『夜打つ太鼓』ほど直接的ではない。筋は簡単で、勝ち戦（対戦中、ドイツは負け戦も勝ち戦と発表して国民を欺いていた）の祝賀会に出かける皇帝が失業者以下の存在である乞食（貧困の象徴）にいろいろ質問し、乞食がそれに答えるというただそれだけである。

ところが、両者の世界観が違うために、乞食の返答はことごとく皇帝（あるいは国民）の世界観（常識）を否定する。乞食は皇帝を信頼も尊敬もしておらず、そのプライドを徹底的に傷つけ、精神をずたずたに引き裂いてしまう。皇帝はその卑俗さが暴かれ、腹立たしくもいやな思いを抱くことになり、去り際に「なぜ（自分に）いろいろ話をしたのだ」と聞くと、乞食は「死んだ（飼い）犬のことを忘れるためだったのさ」とさりと応える。戦勝祝賀会に赴く前の一興にと思って乞食に話しかけたのだが、乞食の方はほんのしばらくでも犬のことを忘れるために皇帝を利用したのである。乞食の方が一枚上手であった。最後に乞食は盲目であることが明かされるが、ブレヒト好みの予言者的性格を帯びている。ブレヒトは、皇帝と乞食の対話を通して貧者の、つまり社会的秩序の外にいるアウトローの世界観を描いて見せている。同じアウトローと言っても、自由奔放の行動的野人『パール』とは違って、こちらはきわめて静的である。

価値観の対立（皇帝対乞食）をテーマにしたこの作品は、ブレヒト生存中は印刷も上演もされなかった。ブレヒト死後の1967年（第2次大戦後22年）に初めて西ベルリンの演劇祭で上演されたが、いわゆるブレヒト劇を見慣れた市民にとって前評判ほど好評ではなかった。読む戯曲、あるいは、ラジオ・ドラマ向きだという評価であった。確かに、極端な言い方をすれば、

話の進め方として乞食が皇帝の質問意図を外すやり方を採っているのが、乞食と皇帝の対話を漫才の「ぼけ」と「つつこみ」のように、読者が適当に台詞を加えながら読むと、結構楽しめる作品である。しかし、寄席芸的な要素があるものの、社会的テーマを扱っているためか、徹底的に人を笑わせる笑劇にまでは至っていない。

価値観の対立を描いたに過ぎない、と言ってしまえばそれまでだが、ただ、21歳の青年ブレヒトは、自分が体験した戦争と今体験している戦後の混乱激動期に対して、社会から一步外に出て完全に静的アウトローの対場で感じるところをデッサン風に、一幕ものの芝居の形で整理したのではないと思われる。青年らしく、また、時代の雰囲気もあってか、これまでの価値観・世界観をズバリと否定する表現が目立つ。以下は、この作品を通して見られる若いころのブレヒトの考えである。

○戦争に対して：

「敵に勝った」という皇帝に乞食は「敵を殺しただけだ。勝ったのではない。白痴が白痴を殺しただけだ」と応じる。ブレヒトにとって、そもそも戦争は勝ち負けの問題ではなく、殺し合うからいけないのである。人が人を殺すのは良くないという考え方は、論理的に証明できない倫理の問題として、ギムナージウム時代からのものであるが、戦争体験を通してブレヒトの体に染み付いていた。しかし、絶対平和主義ではなく、乞食の台詞に「ある男が俺の米に石を投げ込んだら、そいつは俺の敵だ」とあるように、正当防衛を認める節はある。事実、後に『ルクルスの審問』で戦争一般を批判した作品を書いたとき、東独政府筋からクレームが付き、台詞に修正を加え、防衛戦争を認めている。

戦争の描き方は、砂漠を進軍したター・リー皇帝の部隊の話（第2次大戦後に加筆された部分で、ター・リーをスターリンと解釈する研究者もいる）にあるように、勇敢な戦闘を称え戦争を美化するものではなく、延々と続く意味のない進軍に疲れ果てた兵士や従軍女性に視線を向けた描写である。乞食は言う；「あるとき砂嵐が吹き荒れ、兵士を覆ってしまった。それですべてが終わり、もとの静寂に戻った。その土地は兵士のものになったってわけだ」。戦争を支えた兵士たちにとって戦争は無意味であるという見方は、戦場の民間カメラマンがレンズを通して戦死した兵士、殺された民間人を見て持つ考えと同じである。戦犯裁判劇である『ルクルスの審問』では、侵略戦争を行ったローマの将軍ルクルスは死んでから黄泉の国の裁判にかけられ、彼のために犠牲になった陪審員（兵士と市民）によって有罪判決が下され、死者の世界からも抹殺される。

戦死者とその遺族を悼み思う気持ちは直接表現されていないが、大事にしていた犬の死を悲しむ乞食の気持ちで表している。犬は乞食のねぐらで老衰で寿命を全うする。敵の弾丸、飢え、伝染病で死に、戦場に打ち捨てられている兵士たちと比べれば、自然な幸せな死である。戦勝祝賀会に赴く皇帝の「なぜ（犬を）外に放り出さないのだ」との質問に、乞食は「あんたには関係ないね。あんたの胸は今は排水口の穴のように空っぽだ」と吐いて捨てるがごとくに言い切る。犬の死の悲しみが分からない連中には、人の死のそれも分かるはずがない。

戦争の原因について乞食は「戦車をたくさんつくりすぎ、太鼓の練習をやると戦争になるの

さ」と言う。戦争原因のプレヒトの捉え方はこの段階ではまだ表面的で、戦争は経済活動の延長である、と考えるようになるのはもっと後のことである。

○皇帝（為政者）に対して：

皇帝と乞食の間で次のやり取りがある。

皇帝 おまえは皇帝のことをどう思っているんだ。

乞食 皇帝なんていない。国民が皇帝は一人いると思っていて、それが自分だと思い込んでいるだけさ。

この箇所は、ドイツ国内の各州で皇帝が退位し、国レベル、州レベルで暴力を伴った政権争いが起こっていた状況を反映している。プレヒト自身は誰が政権を握ろうが、為政者に対して信頼はしていなかったのではないだろうか。例え進歩的な組織、そしてその最高責任者が皇帝に代わったところで、この作品にもあるように、「みんなの尊敬を頼りにしている」輩を蔑視していた。この態度は反英雄思想として後まで続くことになる。乞食は皇帝に向かって「胸は排水口のように空っぽ」、「目も見えず、耳も聞こえず、何もわかっちゃいない」、「愚か者」などと言っている。しかし、プレヒトは実生活では直接政治運動に関わらず、もっぱら演劇分野において社会と向き合うことを志向していて、一晚の慰みしか与えない劇場を痛烈に批判し、演劇・劇場の改革を試みていた。

○歴史に対して：

皇帝にとっての歴史はアレクサンダー大王であり、シーザーであり、ナポレオンである。「歴史なんてない」と言う乞食にとって大事なものは戦死者であり、飢餓でネズミに食われた人間であり、洪水に襲われ汚い家の中で死んだ人間であり、岩陰で子を産む女性であり、その子の運命である。それが乞食にとっての歴史である。ナポレオンは「世界の半分を支配し、高慢さのために破滅した」と言う皇帝に対して、乞食は「そんなことを信じているのは、奴と国民ぐらいだろう」と応え、ナポレオンは奴隷船の漕ぎ手で彼のために船が沈没し、彼も他の奴隷も死んだと、比喩を使って自身の歴史解釈を話す。プレヒト自身は歴史を別の面から、つまり歴史を支えている者たちの立場から考え直す必要性を感じていたのかも知れない。

○貧困層にたいして：

プレヒトは、作品では社会的秩序の外から秩序側を批判的に見ているが、貧困層（社会的弱者）の生活がどんなものであるかをも描いている。下層社会で生きる人々のプレヒトのイメージは、乞食の世話をしている子どもは、その母親が「ジャガイモ堀り」をしているときに、天使が現れて生ませたという、ユーモラスな側面も持っている。たぶん、この母親は小作人の妻であろう。「洪水になった川のほとりの汚い小屋の中で何人かが死んだ」という台詞からは、たぶん、そういう条件の悪いところでしか住めない人々のことが伺い知れる。被害に遭うのはそういう人々である。「石の上に仰向けに横たわると、生まれた子どもの産声が聞こえる」という台詞からは、たぶん、何らかの事情で岩陰で生まざるを得なくなった女性、あるいは、岩陰に捨てられた乳呑児が想像できる。飢饉で苦しむ人間を食べたネズミが死んだ話からは、た

ぶん、わずかに収穫があったトーモロコシも税金に持っていかれた貧農がイメージされる。貧困者は時には何の理由もなく、人から暴力を振るわれる。これらをひっくるめて、乞食は貧困層には「太陽なんてねえよ」と言う。ただ、貧困者たちにとっての唯一の癒しは音楽である；「ちょっと音楽をやれば、空はもっと美しくなり、大地は肥沃になり、ちょっと音を聞いただけで、寿命が延び、隣人を許す気になる」。音楽は彼らの心を開放するが、彼らは彼ら自身を解放しない。その点をプレヒトは見取っている。皇帝が乞食に向かって、もし世話するものがいなければ「ここを立ち去ってくれ。（死んで）肉が腐ったり、大声を上げられたりしたら困るからな」と言ったのに対して、乞食は「俺が叫ぶだって」と言い返している。彼らは社会的には叫ばない存在なのである。

さて、成功するかどうかは別にして、もし約40年前のこの芝居を今上演するとしたら、いくつかの箇所背景に映像を投影することによって、作品の現代化を試みる事が出来るかも知れない。たとえば、

1) 皇帝が乞食に語りかける最初の場面。

皇帝 おい、お前、なぜ（戦勝祝いの）鐘がなっているのか、知っているか。

乞食 はい、俺の犬が死んだからで。

皇帝 不敬ではないか。

乞食 死んだのは老衰のせいだった。…明け方には死んでいた。…俺はもうねぐらには戻れない。犬の死体が腐りだし、いやな臭いがしてきたんだ。

皇帝 なぜ外に放ってしまわないんだ。

乞食 あんたには関係ないね。あんたの胸はいま排水口の穴のように空っぽだ。

戦勝を祝う鐘は戦死者を弔う鐘に聞こえても不思議ではない。死んだ兵士もたくさんいる。これらの台詞が続く間、戦場に山と転がる兵士の死体（第2次大戦中のものでも良い。その後のものでも良い）をスクリーンに映し出す。おのれの生を全うし幸せにもねぐらに横たわる犬と、無念にも自然な死に方が出来ず戦場に野ざらし状態の兵士の対立。艦船上で勇ましく勝利宣言をする大統領と犠牲になった市民の遺族の写真を対立させても良い。為政者には遺族の気持ち分かるのだろうか。

2) 同じ最初の場面。

皇帝 世話するものがないなら、ここを出て行ってくれ。肉が腐りだしたり、大声を上げられたりしたら困るからな。

乞食 俺が叫ぶとでも思ってるんですか。

乞食のこの台詞は、乞食が何を言おうとしたのか聞き逃すと良く分からないが、スクリーンに現代のホームレスの映像を写すとイメージから容易に理解できる。社会からはみ出た彼らは人の迷惑にならないように、細々とひっそりとおとなしく生活している。決して騒ぎ立てたりはしない。彼らは人に干渉もせず、また、人に干渉もされない暮らしを望んでいる。彼らは決して社会的叫び声は上げない。

- 4) 乞食 先週洪水になった川のほとりの汚い小屋の中で何人かが死にはしたが、流れていきはしなかった。

暴風雨の影響で水川が増し堤防が決壊し、あるいは、上流の人々を守るために人為的に壊され、洪水となり、逃げ遅れた下流の下層市民が家の中で溺死していた写真を映すと効果的かも知れない。ハリケーン、水害、地震などの自然災害の犠牲者になるのは、国際レベルでも国レベルでもたいていの場合、裕福な人々ではない。

- 5) 乞食が音楽は人の心を癒すという話をする場面。

「ちょっと音楽をやれば、空はもっと美しくなり、大地は肥沃になり、ちょっと音を聞いただけで、寿命が延び、隣人を許す気になる」という台詞を聞いてその通りと納得するよりは、ジャズで有名な町と演奏するアフリカ系米人を映し出せば理解しやすい。その町は黒人が多く住む町である。

- 6) 市民や兵隊までも乞食を襲いにやってきた、という話の場面。

敗戦後の混乱期にあって、社会的にも政治的にも経済的にも不安定な1919年のドイツにおいて、乞食が襲われることがあったのかも知れない。この場面を現代にダブらせるなら、黒人が警察に殴り倒されている映像とか、青年に殴られ川に放り込まれたホームレスの写真を出せばよい。

プレヒトは、『乞食 別名 犬の死』を印刷しなかったし、上演もしなかった。その理由は分からないが、何かを試みるデッサンとして寝かし続けたのであろう。ただ、作品を通してひとつははっきり言えることは、歴史（ナポレオンの話）が話題になったときに、「そんなことを信じるものは、奴（ナポレオン）と国民しかいない。しかも、信じるのは間違っている」という乞食の台詞にあるように、演劇が何らかの形で社会変革に参加しようとするならば、国民の偏見（常識）に手をつける必要がある、とそうプレヒトは思ったのではなかろうか。

参考文献

Bertolt Brecht, "Der Bettler oder Der tote Hund", in Bertolt Brecht Große Kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe Bd. 1 Stücke 1 (Frankfurter am Main : Suhrkamp Verlag. 1989)

Jan Knopf, "BRECHT HANDBUCH Theater" (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart. 1986)

プレヒト著、岩淵達治訳『乞食 一名 死んだ犬』、プレヒト戯曲全集第8巻（未来社、1999）

* 台詞の訳は岩淵達治訳を参考にした。